

和紙の技伝承 物語を絵本に

仁愛大教授、学生 2 作目

越前和紙を題材とした物語シリーズの2作目として、仁愛大の教授と学生が、越前和紙の紙すき技術を兵庫県西宮市名塩に伝えた職人とその家族を描いた絵本を製作した。名塩和紙の「紙職元祖」と祭られている越前和紙職人を取り上げた教授らは「地域でもあまり知られていない伝説を、広く知ってもらいたい」と話している。(守長奈生佳)

「名塩」の職人、家族描く



製作したのは人間生活学部子ども教育学科の伊東知之教授(56)と今春卒業した1人を含む学生4人。伊東教授が文と構成を、学生がイラストを担当した。伊東教授は昨年、越前和紙の紙祖神「川上御前」の絵本を製作、今回は越前和紙絵本の2作目となる。

絵本の主人公は、江戸の初めごろに兵庫県から越前市五箇地区に移り住み、越前和紙職人となった東山弥右衛門と、その妻と娘。名塩の重要無形文化財「名塩雁皮紙」は、故郷に戻った弥右衛門が伝えたといい伝承が両産地に残る。

兵庫県の「名塩和紙」を伝えた越前和紙職人と家族を描いた絵本を作った伊東教授(右から2番目)と学生「越前市の仁愛大」

り、名塩には弥右衛門をたたえる墓も建つ。

絵本はA4判のフルカラー20ページ。突然、越前を出た弥右衛門を妻と娘が捜しに行く伝承を物語に落とし込んだ。伝承では再会かなわず、福井県出身の作家、水上勉も小説「名塩川」で悲哀の物語として記しているが、絵本では子ども向けに涙の再会を果たす朗話に仕立てた。

イラストは学生4人が協力し、水彩色鉛筆を使い温かみある絵柄で仕上げた。伊東教授は「地元の伝統産業に興味を持ち、将来職人を目指す子が出るきっかけとなったら」、2年生の高岡志帆さん(20)は「和紙すき体験に来る子どもたちが読んでほしい」と話していた。

1500部を刷り、越前市内の全小学校ほか、県内の幼稚園や保育園、図書館に寄贈。希望者には無償で配る。問い合わせは同大学地域共創センター

☎0778(43)6576。